

社会福祉力動的統合理論の再考

— 社会福祉の理論的展開に対する課題・展望と考察 —

直島克樹^{*1}

要約

本研究は、社会福祉における新たな理論的展開を狙った取り組みの一環として、その検討課題を提起することを目標としたものである。本稿では、社会福祉学において、岡村理論、孝橋理論と並んで、その本質を明らかにしようとした嶋田理論に対し改めて考察を加え、今後の理論的展開の取り組むべき方向性を示したものである。

嶋田理論は、社会福祉力動的統合理論として、体制論的観点とシステム理論の知見を取り入れ、さらには人間の存在そのものとしての人格的な価値を重視することによって体系化されたものである。そこでの要点は、資本主義社会としての体制的観点の着目、社会システム論を批判的に検討し、システムの逆機能性に着目することによるシステムの変容、価値をもった科学としての社会福祉学の構築、つまり近代科学の反省を踏まえた価値的側面と構造＝機能関係との力動性の理論化であった。

本稿では、上記のような嶋田理論の特徴を明らかにした上で、新たな理論的展開に向けて、主に3つの今後の課題と展望を考察した。第一に、システムの発想を基盤とした、関係性の問題である。一般システム理論のような従来からのシステム論は、全体に従属的な側面を導くが、全体性の中に個別性をみようとすると社会福祉学にとって、全体性への調和と共に、部分間の差異の増幅によるシステムの変容を考察していくことが求められるのである。第二に、そのシステムの変容に関わる弁証法論理の問題である。それは、システムの相互限定や相補性を提起するものとして考えられるのである。第三に、価値の科学としての問題が提起される。価値と科学との結びつきを重視する社会福祉学にとり、人間観はその学問としての認識体系に大きな影響を持つものである。ここでは、社会福祉学として、システムの変容とも関連し、共生という思想に着目していくことが求められると考えられるのである。

1. はじめに

近年、社会福祉基礎構造改革の流れを受けた多くの関係諸法が成立し、社会福祉は新たな段階に進んできている。特に措置から契約化への流れは、選択の自由、自己決定にならび、人権尊重や権利擁護といった、社会福祉においてきわめて重要な側面に対する関心を高める契機ともなっている。2009年度より、社会福祉士の指定科目に、新たに権利擁護が独立して付け加えられたことは、その現れとも考えられよう。国家あるいは地方自治体が国民の生活を保障する場合、常にそれは人権を尊重し、個々の権利を守るためのものでなくてはならない。しかしながら、実際は、個人は全体としての社会の中に埋没してしまいがちである。そのような状況の中で、社会福祉は常に個々の人権を尊重し、権利を擁護する立

場でなくてはならないのである。それは個々の人間の機能性のみ担保されない意味を第一義的に考えることでもある。その実現のためには、そういった立場を前提とした社会福祉の理論が求められるはずである。

社会福祉に限らずその実践であるソーシャルワークにおいても、人権や権利といったものは、大前提となる価値として揺るぎないものである。社会福祉学にとって、人権の尊重は最も基盤としなくてはならない事柄と考えられている¹⁾。しかしながら、近代社会が構築される契機となった科学にとって、科学とは没価値的でなければならず、科学とは客観性を確保したものであるとされてきた。そういった中で、社会福祉は、自らを価値に基づく科学として位置づけようとしてきたのである。

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 直島克樹 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp

これまでの社会福祉理論において、人間や社会の構造と機能のみではなく、そこに存在する価値や意味といった側面とのダイナミクスを理論化しようと試みたのが、社会福祉力動的統合理論としての嶋田理論である²⁾。この理論は、構造 — 機能の関係にとどまらず、イデオロギーとの力動に焦点を当てたものである。権利擁護が強く主張される中、それはこれからの社会福祉理論に大きな示唆を与えるものに違いない。そこで本研究では、嶋田理論を再考することによって、改めてその意義を再確認するとともに、そこから新たな社会福祉理論の展開を考察することを目的とする。

すでに、社会福祉理論の新たな展開を狙った、社会福祉内発的発展論としての高田理論は、これからの社会福祉が依拠すべき関係論として自己組織性の原理を示していた³⁾。高田理論の社会福祉理論研究に対する貢献は、それまでの理論がどちらかといえば、社会福祉そのものと外在的側面との二項関係を議論していたのに対し、高田理論は関係論の観点からその外在的側面を包み込み、社会福祉の内発的な力動を明らかにしたことにある。この外在的側面と、社会福祉を構成する内在性の弁証法的論理を説明する関係論こそが自己組織性であった。自己組織性とは、これまでの形式論理を超え、意味的・情動的側面を視野に組み込む原理であり、科学方法論として重要な意義を孕んでいると考えられる。社会福祉理論におけるその重要性はすでに指摘されているとおりであるが⁴⁾、自己組織性が支配する世界とは、構造と機能と意味(価値や情報)といった側面とが常に力動的にあるものである。それは思想的基盤の重要性を再確認するとともに、システムの内発的な変容の理論化でもあった。これからの社会福祉理論を構想するとき、この3者の力動性を捉え、システムの自己組織的な変容をいかに体系化するかが重要になってくると考えられる。後述するように、嶋田理論を再考することによって、そのことを視野においた新たな社会福祉理論への考察を深めていきたいと思う。

2. 社会福祉理論の経過と動向

本稿の目的は、社会福祉における構造 — 機能と、そこに存在する価値や意味としての側面とのダイナミクスを理論化した嶋田理論について再考し、今後の社会福祉理論の展開に対する知見を考察するところにある。ここではこれまでの社会福祉理論研究を概観し、その経過ならびに近年の動向について確認しておきたい。また、本研究がそういった理論的研究の動向とどのように関連しているかについて考察

していかなばならないであろう。

これまでに、社会福祉に対する理論的取り組みはいくつか存在している。そのすべてを整理することがここでの目的ではないので省略するが、特に戦後の主要なものに限定して、その理論的研究の流れを明らかにしてみたい。

例えば、孝橋⁵⁾は、資本主義社会のもつ構造から必然的に生じる社会問題に対応するのが社会政策であり、そこから派生的に生じる社会的問題に社会福祉は対応するものとして考えていた。孝橋にとって社会福祉とは、マルクス主義の経済学に依拠することによって、社会科学的に解明されるものであった。古川⁶⁾によれば、この孝橋の取り組みは「政策論」として整理されることになる。後の後継者たちは、孝橋の理論を批判的に継承していくことによって、社会運動論的な社会福祉の理論を発展させていくこととなった。代表的なのが、一番ヶ瀬や真田、高島による、従来の政策論を乗り越えようとする理論的取り組みである。それは、政策論的な社会福祉論の主体化を目指す取り組みであり、資本主義としての社会を維持させていだけ社会福祉ではなく、社会福祉にはより積極的な意義があることを強調したのである⁶⁾。特に真田は、すでに吉田がその理論史研究で指摘しているように、福祉労働の視点から、対象・主体・運動の力動関係としての「三元構造」を明らかにし、そこから「政策」と「技術」との統合を試みた⁷⁾。それは、資本主義社会の社会福祉の不変性を論じた孝橋理論を批判し、社会福祉の変化や発展のメカニズムを明らかにしようとしたものだったのである⁷⁾。

一方で岡村⁸⁾は、人間のもつ生理的・心理的欲求と、現代社会を成り立たせている基本的な社会制度から、個人の社会生活における7つの基本的要求を構成し、そこでの主体的側面と客体的側面との二重構造に着目した。社会福祉はこの主体的側面に立つ唯一の制度・実践であり、そこに社会福祉の固有性があることを主張したのである。また、岡村理論では、対象認識の原理と機能的原理の統一性が必要であるとの理解の下、社会性・全体性・主体性・現実性を社会福祉援助の原理として位置づけ、そこから最終的には評価的・調整的・送致的・開発的・保護的機能という5つの機能を説明しているのである。そのため、岡村理論は、社会福祉の固有の視点を求めたという点から、「固有論」として整理される場合もある⁶⁾、本質論争のように「技術論」として整理される場合もある。岡村理論は、近年においてもその影響力が健在であり、多くの実践に関する研究の理論的枠組みとして用いられている。

こういった「政策論」と「固有論」あるいは「技術論」としての社会福祉理論が議論されていたほぼ同時期に、社会福祉の理論化を試みていたのが嶋田であった。詳細は後述するが、嶋田⁹⁾は、人間の人格的な側面を第一に考え、人間や社会の構造と機能的側面のみでなく、そこに存在する価値や意味といった側面とのダイナミクスを理論化しようと試みたのである。資本主義体制に基づく経済的側面と、資本の要求から生活構造を守ろうとする人間の人格的要求に基づいた社会的側面との2つの円周が存在し、ここに存在する社会関係を焦点とする社会福祉は、その生産関係としての物質関係と、生産関係以前に関わるイデオロギー関係の力動を捉えなければならないのである。また嶋田の理論は、パーソンズの社会システム理論を批判的に検討することによって、その問題点を指摘し、均衡モデルに対する闘争モデルの必要性を説いているのである。この社会福祉力動的統合理論は、日本の社会福祉の3大理論の一つであるが、「愛」や「正義」といった人格的側面を理論において強調するものであるため、上記の孝橋理論や岡村理論ほど継承されてこなかったと考えられるのである。

また、三浦¹⁰⁾は、「社会福祉経営論」として社会福祉理論を構築することを試みている。三浦理論に対して詳細な検討を加えている小笠原¹¹⁾によれば、「政策実務理論としての色彩を有する『社会福祉経営論』であるが、他方で、社会福祉理論史から観ると、それは本質論的な方法による社会福祉政策論に対し社会福祉行政論ないし管理論としての新たな政策理論の範疇を形成するものであった。また、実践論・処遇論の立場から構築されてきた社会福祉理論に対して政策科学の必要性を打ち出したという点で、画期的な意義を有するものである。『福祉ニーズとこれに呼応するサービスの類型把握をもとに、サービス供給に必要な資源の調達および配置を総合的に管理・運営する仕組みに関する理論』¹¹⁾と考えられている。これまでの権利体系としての社会福祉を変革するものとして批判されることもあるが、三浦理論の実際の意図は、むしろ社会福祉を内在的に変革していく積極的の改革論の提示¹¹⁾であり、インクルージョン概念など、近年のニーズに着目した社会福祉の一般施策化とも連動するものと考えられるのである。

近年での理論的取り組みとして、古川と高田の理論的取り組みを挙げねばならない。古川¹²⁾は、社会福祉の前提となる社会を4つの位相(資本主義社会、市民社会、文明社会、共同社会)に分類し、それらが相互に規定しあう関係にあることをまず明らか

にする。そして、それら経済システム、政治システム、文化システム、社会システムそれぞれと関連するのが生活システムと考える。生活システムとは、「人びとの生活を規定する主体的諸条件と環境的諸条件とが相互に接触し、規定しあい、生活のありようを定め、方向づける場であり、またその過程」¹²⁾と理解され、そこに社会福祉の起点を置き、生活支援システムとしての社会福祉を説明しているのである。また、古川¹³⁾は、一般社会サービスと社会福祉との関連性を考察するために、社会福祉の独自性と補完性を説明する「社会福祉のL字型構造」、さらには社会福祉を基幹として、他の一般社会サービスをそこに結びつく房として捉える「社会福祉のブロッコリー型構造」を示し、現状の社会福祉を説明しようと試みているのである。そこには、社会福祉を限定して捉えようとする理論的方向性を見直すことを通じ、いったん社会福祉を一般施策の中に戻し、そこから新たに社会福祉の独自性を体系化することを意図している方向性が考えられるのである。

高田³⁾は、前身となる社会福祉混成構造(=社会福祉の構成要素としての政治・経済・文化のPEC構造に、内発的発展(Ed)を因子として組み込んだ構造)論をさらに精査し、社会福祉内発的発展論として新たな社会福祉理論の体系を示している。そもそも内発的発展論とは、西欧を中心とした近代化の反省から、経済成長を中心とした考え方を、人間そのものの成長、人権の確立を目指すことを中心とした考え方へと転換させるものである。その着眼点としての対象は地域にあり、近年地域福祉に関する取り組みにおいて、課題と考えられている¹⁴⁾。高田理論は、EdPEC構造として今後の社会福祉を捉え、その思想、方法、価値、創発、実理をそれぞれ考察したものである。特に思想として共生を位置づけ、社会福祉における人間観のあり方まで検討している点に、今後の社会福祉理論を考察する契機があったといえよう。

以上、これまでのいくつかの社会福祉における理論的取り組みを概観してきたが、その動向としては、古川の取り組みにみられるような、社会福祉を根本的に見直していく方向性を捉えることができる。L字型やブロッコリー型といった社会福祉の構造はその現れである。しかしながら、そういった古川の理論的な取り組みは、非常に緻密で膨大である反面、現状をどのように捉えるかに終始し、理論的研究にとって必要な、力動的な原理的側面への検討が弱いという欠点を抱えている。つまりL字型であろうがブロッコリー型であろうが、そこに存在する原理が何であるのかは明らかにされていないと考えられる

のである。

それに対し高田理論は、関係論として社会福祉のそういった原理について検討を試みたものとして考えることができる。内発的發展は社会福祉の新たな原理になりうるし、そこからさらに新たな原理を生み出すものである。この点が根本的に古川の理論的取り組みと異なっている点である。古川の取り組みは、現状を説明できて、そこから力動的な原理を生み出すことができている。そのため、理論的結論が現状の後追的とならざるをえないのである。本稿では原理的側面に対して関心があり、そのため高田理論の系譜に関心をもつことになる。すでに指摘しているように、そこで示された関係論としての自己組織性は、新たな社会福祉の原理と考えられる。そして、その萌芽を嶋田理論にみよとするのが、本稿での再考の意味である。以下では、自己組織性と関連して、理論的基盤となるシステムの考え方について検討し、そこからさらに嶋田理論を再考することによって考察を深めていきたいと思う。

3. 基礎的視点としてのシステム概念

— 一般システム理論の検討から —

近年の理論的動向としてすでに述べたように、高田理論の一つの注目すべき点は、社会福祉における関係論として自己組織性を位置づけていることであつた。社会福祉学における理論的取り組み（例えば岡村理論、一番ヶ瀬理論）が、弁証法的な側面を強調していることから考えて、この自己組織性は、今後の社会福祉理論の展開においてキーとなる原理となりうる^{†1)}。また、それが基盤とする“システム”という概念は、社会福祉学にとって必要不可欠であることはいうまでもない。高田¹⁵⁾は、「システム論の視点は、その学問としての体系化、認識すなわち問題の所在を明確にする診断の視点のみならず、実践すなわち援助のための視点、そのための科学的な方法を示唆しうる」と言及している。例えば、実践におけるアセスメントにおいて、システムとしての認識は、ワーカーが問題を捉えていく上で、生活の全体性を視野に入れた認識を可能とするものである。本稿の目的である嶋田理論も、このシステムという概念に着目しており、ここでは基礎的視点となりうる“システム”について、特に一般システム理論の特徴に着目して考察を加え、次節への足がかりとしたい。

“システム”という概念は、非常に抽象的な概念でもあるが、アメリカにおけるソーシャルワークが、自らの心理還元論的、直線因果論的傾向を乗り越えようとした際に、その契機となったことは有名であ

る。後にその機械論的用語や、援助・支援方法を具体的に指示するものではないというメタ的な視野しかもたないなどといった批判を受けることにはなるが、システムとしての考え方は、間違いなくソーシャルワークを新たな段階へと導いたのである。松井¹⁶⁾によれば、社会福祉学にとってのシステム理論とは、「人々と人々を取り巻く環境とを切り離したり、いずれか一方に比重をおかないで、両者を全体的に相互作用しあうものとして分析する枠組みを提供する」ものなのである。それは、社会福祉学における対象認識の振り子現象に、一定の解決策を与えるものであつたのである。

社会福祉学やソーシャルワークにおいて導入されたシステム論とは、厳密に指摘されることはほとんどないが、主に一般システム理論を指していると考えられる¹⁶⁾。Bertalanffy¹⁷⁾によって構築された一般システム理論は、それまでの科学における要素還元主義を批判的にとらえ、部分に対する全体性との関連に言及し、“システム”としての概念を体系化したものである。その観点からして、“システム”を扱うことはそれまでの科学的方向の立て直しを意味していた。すなわち、分化の流れに対し、科学の統合・統一を意図していたのである¹⁸⁾。分析的な手法というのは、「部分」間の相互作用がまったく存在しないか、一定程度無視できるくらい弱いときに適用できるものなのであり、システムの問題は、その点の限界を克服していくことを狙ったのもであつたのである¹⁷⁾。一般システム理論の主題は、“システム”一般に対して用いることのできる原理を定式化していくことであり、組織化された複雑性に対して取り組むことが意図されたものだったのである。

その一般システム理論の主な特徴の一つは、開放システムにある。それまでの科学的流れが、主として閉鎖的なシステムを扱っていたのに対し、一般システム理論では、開放システムこそが、本質的であると主張したのである。この考えが、自然科学や社会科学を問わず、あらゆる領域で用いられる一つの契機ともなつた。開放性とは、熱力学のエントロピー^{†2)}とも関連するが、システムが平衡状態に至らず、常に非平衡状態を保ち、定常状態を維持していく際の根本的な原理である。開放システムとは、一つの対象となるシステムに対して、他の様々なシステムからの資源、情報、エネルギーが流入（インプット）され、それがシステム内で処理され外に流出（アウトプット）することによって、システムに変化が起こることを説明するものである。システムのインプットやアウトプットは、サイバネティクスで示されたフィードバックの原理とも関連しており、一般

システム理論で定式化された開放システムとは、このフィードバックの原理を用いて、システムの目標からのズレを修正することを定式化したものであった。つまり、そこで示されたフィードバックの原理は「負のフィードバック」と呼ばれるものであり、様々な相互作用を繰り返していく定常状態としてのシステムを、維持していくそのあり様が示されたのである。一般システム理論でいわれるシステムというのは、環境の変化に適応して定常状態を維持しようとする環境適応的なシステムなのであり、基本的に部分が全体に従属することが前提とされていたのである。

今田¹⁹⁾が述べているように、そもそも一般システム理論とは、長年にわたる機械論と有機体論との対立^{†3)}の中で、有機体論の性質である秩序・全体性・目標志向性・成長・分化などを、機械論の中に取り込むために提出されたものであった。一般システム理論では、主客の分離・非分離の問題に取り組むこと、システム変容の視点を位置づけることを意図していたが、具体的に取り組まれることはなかった。そのため、一般システム理論は、システムの維持に関して体系化されているが、システムの変容に関してはその枠組みを構築していないのである²⁰⁾。社会福祉学研究の立場から稲沢²¹⁾は、一般システム理論が、「正のフィードバック」に基づいたシステム変容理論を欠如させていることを指摘している。この視点は、社会福祉学の中で、システムの発想が無意識にも取り入れられている反面、見落とされがちな点でもある。特に社会福祉の実践においては、環境適応的なシステムよりも、自らが主体となって働きかけ、変化を導く自己組織的なシステムの構築（システムの内発性）が求められる。社会福祉学において、そのシステムの変容を理論的に位置づけることは、今後の新たな理論的展開となりうると考えられる。特に一般システム理論で示されたシステムの維持的側面と、自己組織的なシステムの変容としての側面とでは、主体性の論理が異なっているという点は、これまで社会福祉学の中で問われることはほとんどなかったと考えられるのである。

現状維持的か自己組織的かという問題は後述するとして、“システム”という発想は、社会福祉学において、特にその統合性を意識するという点では無視できないものである。近年特に関心を集めているジェネラリスト・ソーシャルワークも、このシステム論の枠組みを基盤としたものである²²⁾。社会福祉学における観点は、様々な専門分化した領域からなる個々の生活を、一つの全体として捉えていくことにある。この全体性を意識し、個別をみるところに、

社会福祉学としての一つの契機がある。社会福祉学において、積極的に取り入れられたのが一般システム理論であったことはすでに述べた。そのシステムの発想を特に重視していたのが嶋田理論であった。そこでは、一般システム理論に依拠したパーソンズの社会システム論を批判的に検討しており、今後の社会福祉学の展開を狙う上で、無視することはできないものといえよう。その批判は、システムの変容に向けられたものであった。嶋田理論は、社会福祉学の理論として、システムが全体性を維持すると同時に、逆機能が働き、システムが変容する力動を捉えようとしたものなのである。次節以降では、システムの発想を強く持つ嶋田理論に関し、その特徴を明らかにし、考察を深めていきたいと思う。

4. 嶋田理論の再考

社会福祉力動的統合理論としての嶋田理論は、岡村理論、孝橋理論と並んで日本の代表的な社会福祉理論の一つである²⁾。前節において、システムの特徴を明らかにし、一般システム理論の問題点を指摘したが、嶋田理論もパーソンズの社会システム論を批判することによって、同様の考察を導いている。ここではそういった点に着目しながら、「正義」「愛」といった概念から基本的人権などの価値を重視し、そこから理論体系を構築した嶋田理論の特徴を明らかにしていきたい。

始めに、嶋田理論の基本的な考え方を考察しておきたい。嶋田理論²³⁾では、社会福祉の定義^{†4)}からも理解できるように、社会福祉を一定の社会体制の下において考える点を第一の特徴としている。特に資本主義体制化におけるメカニズムに着目し、その体制が、心術として利潤追求の自由を、秩序として個人主義を、技術として打算的合理性を基本原理としていることを明らかにしている²³⁾。社会福祉において、経済的要因は排除できるものではなく、資本の蓄積、労働力の保全など、資本主義が描く経済的側面（「経済的なもの」）が社会福祉の本質には存在するということを主張するのである。それは社会福祉実践が体制温存的役割をもっているということでもある²³⁾。

こういった資本主義体制に基づく経済的側面が存在する一方で、嶋田理論では、その資本の要求から生活構造を守ろうとする、人間の人格的要求に基づいた社会的側面（「社会的なもの」）が存在することを主張するのである²³⁾。社会政策同様、社会福祉においても、この異質な二つの力動的な対立が絶えず存在すると考えなくてはならない。そして、社会福祉実践は、後者の生活構造の防衛に関連した活

動を展開していくことを求めるのである。そこで焦点となるのは社会関係であるが、そこでは生産関係としての物質関係と、生産関係以前に関わるイデオロギー関係を含んでおり、そこから規定される社会福祉は、その連関を無視できないのである。この物質関係とイデオロギー関係の力動的関係を捉えることを、社会福祉は必要とするのである。

第二に、嶋田は、社会関係より生起する社会生活の不充足・不調整を理解するためには、構造＝機能論的理解が必要であることを主張し、パーソンズの社会システム理論を批判的に検討している²³⁾。パーソンズに代表される機能主義的社会観の特徴は、社会の諸要素の機能が、常に社会全体の存続に調和的に貢献することを前提としており、現状の社会秩序の肯定的受容が暗黙に了承されているところにある。そこではあらゆる行為が現状の秩序を維持するものとして位置づけられ、保守的な立場を擁護するものでしかない。嶋田²³⁾によれば、資本主義社会における生活構造防衛のための実践として位置づけられる社会福祉にとり、均衡維持を本質とするパーソンズの社会システム論の最大の誤謬は、機能が構造に従属されてしまっている点にあるのである。それはすなわち、各要素が必ずしも全体的な均衡に寄与する予定調和的な機能を持つとは限らないという点を見落としてしまっていることでもある。全体性に対する過度の適応を強調することは、社会福祉にとって重要な主体性を覆い隠してしまうのである。その点を踏まえ、社会システム論を前提としつつも、それがもつ均衡モデルに加え、逆機能概念を導入することによって、部分の力を評価し、現状を変革していく生活構造の防衛のための闘争モデルとの両立を説明している点に、嶋田理論の大きな特徴があると考えられるのである⁹⁾。

社会福祉というシステムの中に、全体性に従った均衡モデルと、個々の要素の相互作用からなる闘争モデルの弁証法的統一・同時発生性を理論化したという点で、嶋田理論は、主にシステムの均衡維持を理論化した一般システム理論を乗り越えたシステムの発想をもっていただと考えられる。それは社会福祉学において、新たな理論的展開をもたらすものであったといえる。また、嶋田理論はそういったシステムの力動性を主張する中で、社会福祉学としての価値を重視する。嶋田によれば、「科学の構造・機能論が価値論を喪失した客観化認識をもって、科学を塗りつぶしたところに、20世紀の社会活動の根本的な誤謬が生まれた」²⁴⁾のであり、社会福祉学とは、「一定の文化的価値観と結びつき、その実現方策を探求する科学でなければならない」²⁵⁾のである。社会福

祉において重視されるのは、主体的な価値判断であり、そしてキリスト教的理解に基づいた「正義」と「愛」を重視しなければならないと嶋田は主張する。ここでは、こういった価値的側面が、社会福祉学を考えていく上で重要な意義をもち、科学そのものに組み込まれているということを明らかにすることが目的のため、「正義」や「愛」について議論することは避けるが、「正義は愛に先行し、愛は正義を全うする」という言葉は、嶋田の理論の根幹にあるものである。

こういった価値を科学として考えるということは、近代科学とは相反するものとなる。一番ヶ瀬¹⁾は、社会福祉学は近代科学とは異なった側面をもっていると考え、特に近代科学の客観主義を批判している。そのため、社会福祉学には、客体即主体への転換が必要だと主張するのである¹⁵⁾。社会福祉学とは、近代科学が前提とする主客の分離そのものを問い直すものでなければならない。むしろ力動的統合理論は、この主客の力動そのものに対して、社会福祉の立場から考察したものととも考えられる。それは、社会福祉には、「主体的人格と客体的環境との力動的相互作用において人間行動を理解する態度」²⁵⁾が求められるという点からも明らかである。社会福祉の本質に迫る上で、主客の非分離を考慮していく点に、嶋田理論の一つの特徴を見ることができるのである¹⁶⁾。

以上に示した、嶋田理論の特徴を簡単に整理するならば、まず、①社会体制的観点からの社会福祉の理論構築が考えられる。すなわち、資本主義が描く経済的側面と、その資本主義体制化における人々の生活構造を防衛するために、個々の人格性を尊重することを目指した社会的側面との交錯による力動性の理論化である。次に、②①の観点から導かれる均衡モデルと闘争モデルの同時発生性であろう。一般システム理論を基盤としているため、パーソンズの体系化した社会システム論は、主に全体性に対する予定調和性を重視する均衡モデルを主張するものであった。しかし嶋田理論では、逆機能的な側面を考慮すべきことを主張し、システムの変容を導く闘争モデルをも同時に位置づけることを狙ったのである。また、③社会福祉学を価値をもった科学の立場として体系化している点が考えられる。社会福祉学は専門分化した領域からなる個々の生活を、一つの全体として捉えていく科学である。社会福祉学は、近代科学が構築した没価値的なものではなく、むしろ人間の存在そのものとしての人格的な価値を重視し、体系化されなければならないのである。そこで嶋田理論においてキー概念となったのが、キリスト

教的な考えに基づく「正義」や「愛」という概念であったのである。そして、そういった価値と構造＝機能関係の力動にこそ、社会福祉学が成立することを主張したのである。次節では、この嶋田理論を踏まえ、新たな社会福祉理論について考察を行っていききたい。

5. 新たな社会福祉理論に向けた一考察

これまで社会福祉学において、その本質に迫ろうとする理論は上述したようにいくつか存在している。本稿で検討した嶋田理論もその一つであるが、代表的なものとして岡村理論が考えられよう。繰り返になるが、岡村理論は、社会生活上の7つの基本的要求、社会関係の二重構造、社会福祉援助の原理を特徴としている。そして、社会福祉が対象とする問題を、社会関係の不調和、社会関係の欠損、社会制度の欠陥とし、それに対し、社会福祉は評価的機能などの5つの機能をもって援助・支援するものとして整理されているのである。近年この理論はわが国におけるケアマネジメントに取り入れられるなど、成立から半世紀以上が経った現在においても、いままなお多くの研究の理論的根拠となっている^{†7)}。その一つの背景として、岡村理論の科学的視点が考えられるのである。

社会福祉の科学的背景として、例えば佐藤²²⁾は、ジェネラリスト・ソーシャルワークの研究の中で、「人間：環境：時間：空間の交互作用」を捉えることの重要性を考察している^{†8)}。これは、過去から現代に至るまで、哲学における根本的な問題である²²⁾。佐藤によれば、これからの社会福祉学の課題は、これら4つの動態性から社会福祉の現象を明らかにすることである。人間と環境をセットで考え、空間と時間が共存する視点をもつことが、社会福祉全体に必要であることを示唆しているのである。理論というのは、捉えるべき部分と全体、そして時間と空間について一定の洞察の形態をもつものである。理論は、基本的にこれらの側面をある一側面、一定の段階で固定し、そこから一つの体系化された説明を導くものとして考えられなければならないのである。

岡村理論の示した社会福祉の原理はまさにそれを表しているのではなかろうか。社会性は空間を、全体性は全体としての環境や社会、地域を、主体性は部分としての人間または生活を、現実性は時間を示していると考えられるのである。その点に、今日においても多くの研究・実践の根拠となりうる一つの理由がある。新たな社会福祉理論の構築を狙うとき、この点を踏まえて考察を深めていかねばならないであろう。特に、その4つの視点を静態的に捉えるの

ではなく、佐藤が指摘しているように、その動態性を説明していくものでなければならず、その動態性を説明する原理の下に理論化が図られなくてはならないであろう。その点に関し、以下では嶋田理論を踏まえ、特に全体と部分の問題に焦点を絞り、さらに考察を行っていきたいと思う。

前節までに、主に“システム”の認識について考察を加え、その点を踏まえ、嶋田理論の特徴を明らかにしてきた。はじめにでも述べたように、本稿は、嶋田理論の考察から、新たな社会福祉理論について考察を行っていくことを目的としている。そこでの嶋田理論の要点は、体制的観点の着目、システム維持と変容の同時発生性、価値をもった科学としての社会福祉学の構築、つまり価値的側面と構造＝機能関係との力動性の理論化であった。この点を踏まえ、これからの社会福祉理論の展開を展望するのであれば、以下のように整理することが可能であると考える。

第一に、嶋田理論で示された体制論的観点は、全体としての資本主義社会と、その部分としての生活構造との対立を捉えようとするものであった。これは国家と生活者をダイレクトに捉えようとするものでもあろう。国家として資本主義社会そのものを全体とし、そこに部分として生活構造を想定すれば、社会運動として全体を変革していこうとする論理が生じる。また、近年のように地域（地方自治体やコミュニティなど）が主体となって生活構造を支援していく流れの中では、部分としての生活構造を踏まえ、それを包含する全体としての地域を、計画的に変容させていこうとする論理を見出すことができる。これらのことを、システムの発想でもあるマクロ・メゾ・ミクロとして整理していけば、資本主義社会と生活構造を媒介とする地域が重視されることになるのである。そのため、地域福祉への関心は、中間項としての媒介への着目に他ならず、社会福祉学全体を捉える理論としては、この中間項までも含めた全体の流れを捉えることが必要なのである。体制論的観点からの把握は、近年の資本主義社会そのものの変容を捉える必要はあるが、こういったシステムとしての全体と部分の関係を、どのように考えていくのかという点を生起させるのである^{†9)}。

第二に、上記のシステムの全体と部分の関係性に関連して、システムの全体性の維持と変容をいかに捉えていくかという体系的説明が求められる。特に、社会福祉学の領域では、システムの発想を重要視しながら、この問題を深く追求することはなかった。一般システム理論の枠組みでは、人と環境との作用を説明するものの、環境からの働きかけがなければ

その人のシステムは作用しないことになる。そこでは、システムの主体性、自己組織的な変容を説明することができず、環境適応的なのである。社会福祉学としての課題は、このシステムの変容としての側面を位置づけることである。嶋田理論は、安定・調和を志向するシステムの機能性のみでなく、逆機能性の存在を位置づけようとしていた。それは、システムの安定性と不安定性を一体的に捉える弁証法論理の展開であり、形式論理を乗り越えた取り組みの一つの萌芽でもあった。

このような社会福祉学における弁証法的理解は、嶋田理論のみにみられることではない。谷口²⁶⁾は、岡村理論について、その弁証法的側面を考察している。谷口²⁶⁾によれば、岡村理論は社会と個人を一体として捉える弁証法論理を有しており、主体的側面と客体的側面からなる社会関係の二重構造を特徴としている。そして、その弁証法論理と同時に、機能主義的に論理展開していく独自の理論体系なのである。また、「岡村の『社会福祉の論理構造』とは、社会が社会福祉の論理的合理性を受容し、社会福祉が合理性の論理を追求していくための理論的根拠として示されている」と考え、この論理展開をパーソンズの社会システム論に代表される機能主義的な見方で捉えるならば、社会体制の温存的な側面を強調してしまうことの危険性を指摘するのである²⁶⁾。さらに谷口²⁶⁾は、岡村理論の依拠する弁証法は、「個物と個物が織り成す世界の生成と運動の原理」である西田哲学における場所的弁証法であると考察する。ここでは個物の自己限定、個物と個物の相互限定などが重要な意味をもつことになるのである^{26), †10)}。そして、主体的側面に対して優位性を与えることは、西田の哲学における論理に従うゆえであることを考察するのである²⁶⁾。

上述してきたように、システム論の発想をもつ嶋田理論においても、資本主義社会が規定する側面と、生活構造が規定する側面として、相互限定・相補性の論理を組み込むことの重要性が指摘されていた。それは、システムの変容を社会福祉学として捉えるために必要なこととして把握されていたのである。また嶋田理論においても主体性は必要不可欠な視点なのであり、社会福祉学として主体性をその根幹に据えていくのであれば、弁証法論理からなる論理構造を位置づけていかななくてはならないのである。その一つの原理として考えられるのがこれからの社会福祉原論として高田理論によって示された関係論としての自己組織性であり、思想としての共生であった。今後の社会福祉理論を展望するならば、嶋田理論や岡村理論を踏まえ、その論理延長上に高田理論を捉

えていく視点が求められると考えられるのである。

第三に、基本的人権などに基づいて社会福祉学を考えるならば、そこで想定される人間観について考えを深めていかねばならない。岡本²⁷⁾によれば、基本的人権などの価値は、決して社会福祉の占有のものではなく、他の専門職においても一般化されているものである。ゆえに、その点に社会福祉の独自性・固有性を求めることはできない。独自性・固有性を追求するならば、社会福祉学独自の科学方法論が求められることを考察しているのである。その点について、直島²⁸⁾は、科学方法論としての演繹法・帰納法について、新たな理論的展開における問題点を考察し、社会福祉学における科学方法論として、そこに意味解釈法を導入していくことの必要性を示している。その必要性の根拠は2つの観点から説明される。一点目は、これまでの科学理論の発展は、帰納法的な推論によって行われたのではないということ、そして、新たな理論的展開には新しい概念が含まれているということである。二点目は、社会福祉学に関連している。すなわち、これまでの科学とは、客観性を追及し、構造と機能との関連性を説明するものであった。しかしながら、社会福祉は、主体として存在する一人の個人のもつ意味を捉え、その視点を支援へと結び付けていく点を特徴としている。そのため、その主体のもつ意味を捉えるためにも、意味解釈法を必要とするのである。以上のことより、社会福祉学における科学的方法論として、演繹 — 帰納 — 意味解釈の力動を捉えることが求められると考えられるのである。

そのとき必要となることが、近代科学と密接に関連する人間観の見直しである⁴⁾。近代科学成立の一つの契機となった啓蒙思想において、人間とは能動的かつ理性的であり、合理的な存在として位置づけられた。そのため、近代以降の社会福祉にとって、その援助・支援を大別するならば、理性的かつ合理的な個人の側面の欠如を補うか、あるいは、理性的・合理的側面を促進する環境の不足を補うといったものであった。両者の対立は、個人か社会かといった議論とつながるものであるが、どちらも理性的かつ合理的な人間像を前提とし、本来あるべきその側面との差異を縮減する意図をもったものという点では共通しているのである。

しかしながら、これまで考察してきたように、システムの変容を考えるならば、そういった差異を少なくするのではなく、むしろ個々の存在の意味に立脚し、その差異を増幅させる側面にも目を向けなければならない。それは、対立・矛盾を含みながらも、個々の差異を尊重していく“共生”^{†11)}の思想に基づ

いて科学を再構成していくことに他ならない。この共生は、共同を前提としており、差異の尊重には同質性が不可欠であり、逆に同質性には差異の尊重が不可欠である。共生と共同は相補的な関係にあり、その思想をもった人間観に従うことは、科学を相補的な関係性を捉えるものへと導くことになると考えられるのである。そこでは二元論的な考え方は見直しを余儀なくされる。すなわち、理性的とか合理的というのは一つの側面でしかない。この側面を無視することなく、存在そのものを捉え、そこにある相互限定、相補性を捉えることが必要であると考えられるのである。

6. おわりに

本稿は、主に社会福祉力動的統合理論としての嶋田理論を再考することによって、今後の社会福祉における理論的展開に考察を試みたものである。しかしながら、この考察はあくまでも理論研究の序説部分でしかなく、要点を整理することに留まった感が否めない。特に、システムの発想と、その変容の論

理を社会福祉学として考察していくことの重要性を指摘することはできたが、その具体的検討課題に対しては、全体と部分との関係性の問題、主体性を位置づける(場所的)弁証法論理の問題、科学そのものと関連する人間観の問題などを大まかに指摘するに留まっているのである。

例えば、システムの全体と部分の問題を取り扱うのであれば、近年のネットワーク論に関する知見を参考にする必要もあろう^{†12)}。それは、社会福祉学における連携や関係性に対しても一定の考察を導くことになると考えられる。また、弁証法論理は自己組織性の原理のみでなく、複雑系の科学への展開を示唆するものであるかもしれない^{†13)}。さらには、科学史をより詳細に検討することによって、そこに存在する人間観や、それとの科学との連動性をより詳細に明らかにしていく必要性もあろう^{†14)}。本稿でのとり組みは、そういった課題を検討する契機となると考えられる。いずれにしても、これらの点に対する詳細な検討は今後の課題としなければならないであろう。

注

- †1) なぜならば、弁証法というのは、二つの矛盾し、排除しあう対立したものの統一の過程を意味しているが、そういった矛盾や対立から生み出されるシステムの「ゆらぎ」などを重視するのが自己組織性の特徴だからである。そのため、弁証法は自己組織性の先駆形態として考えられているのである²⁹⁾。
- †2) エントロピーとは、クラウジユスが提案した言葉である。「変化を司るもの」とされるエントロピーは、熱量と温度の比で定義されるものであったが、現在は情報分野をはじめ、多くの場面で用いられるものとなっている³⁰⁾。特に、それは「科学」の領域に不可逆性(時間の概念)をもたらしたことも特徴的である。社会福祉内発的發展論としての高田理論では、このエントロピーの考え方をを用いて、その理論体系が説明されているのである。
- †3) 機械論と有機体論との関係については、直島³¹⁾を参照されたい。
- †4) 「社会福祉とは、その置かれた一定の社会体制のもとで、社会生活上の基本的欲求をめぐって、社会関係における人間の主体的および客体的諸条件の相互作用より生起する諸々の社会的不充足、あるいは不調整現象に対応して、個別的または集団的に、その充足・再調整、さらに予防的処置を通して、諸個人または集団の社会的機能を強化し、社会的に正常な生活標準を実現することによって、全人的人間の統一的人格を確保しようとする公的ならびに民間的活動の総体を意味する。これらの諸活動は、損傷された能力の回復、個人的・社会的資源の提供、および社会的機能障害の予防の三機能を包含する」²³⁾。
- †5) 古川¹³⁾によれば、社会福祉学は価値中立的ではありえない。よってその研究は、価値志向的を認識しつつ、手続き的に自制的、価値禁欲的でなければならないものであると主張する。
- †6) 科学における主客の問題と、キリスト教とは関連があると考えられている³²⁾。そもそも科学と神学とは一体的なものであった。近代科学に多大な影響を与えたとされるニュートンにしてもデカルトにしても、それは神の計画を明らかにすることを意図したものであった。しかしながら、宗教改革、産業革命、啓蒙思想の台頭など、キリスト教がその存在理由を問われる中で、人間個人の内に深く関与していくことになる。それは魂の救済でもある。つまり、西洋社会における主客分離の原則が導かれる一つの要因が形成されたと考えられるのである。これに対し、「縁起」という仏教の発想をもつ東洋社会では、むしろ主客の非分離性が本質的事柄と考えられていたことは、関係論に関心がある社会福祉学にとって重要な視点となりうると考えられる。
- †7) 岡村理論の特徴は主体的側面と客体的側面から社会関係を捉える点にあるが、そこではその主体性の中に客体性が入り込んでいる。個人の社会的生活というものは、専門分化された社会制度からそれぞれ規定されるものであるが、個人は

その統合者として存在する．そこでは厳密に主客の分離は成り立たない．そこでは一つの主体と一つの客体の関係の中に、他のすべての客体が含まれているからである．全体性と主体性の原理は、この点から考えなければならないのである．

- †8) 佐藤²²⁾は、交互作用と相互作用を使い分けている．相互作用が一方向的な直線的因果関係を示すのに対し、交互作用は原因が結果となり、その結果が原因となるような循環的なフィードバック過程を表すものと考えられている．
- †9) また、体制論的観点は、経済への関心のみならず、そこに介在する政治への視点を拓くことにもなる．嶋田理論では、資本主義社会(経済)と生活構造(文化)の二つの側面が主に強調されたわけであるが、これに政治的背景を考慮することは社会福祉を考えていく上で欠くことはできない．社会福祉の立場から、松井³³⁾は、経済・政治・社会の力動を、高田³⁴⁾は、経済・政治・文化の力動を捉えることを示している．
- †10) 谷口²⁶⁾は岡村の理論体系を、「ノエシス的方向(意識作用の主体的方向、『見る』方向)として、西田の場所的弁証法論理を思想的根拠としてもち、ノエマ的方向(意識作用の客観的方向、『見られる』方向)として、機能主義的な社会関係論として展開されるという『二重構造』をもっており、その二つの方向が統合されて社会福祉固有論へと展開される独自の理論体系」として整理することが妥当であると考えている．この点の二重構造に関しては、今後の研究の検討課題でもある．
- †11) 「共生とは、単に調和を志向した穏やかなものではない．そこでは常に競争、葛藤、対立など、矛盾に満ちた「ゆらぎ」の世界からの共時的な秩序の創出を前提としている⁴⁾．
- †12) 近年のネットワーク研究が明らかにしている“ハブ”の存在は重要であると考えられる．“ハブ”とは、非常に多くのリンクをもつノードを指しており、その理解に従うならば、ネットワークの結びつきは決してランダムなものではない³⁵⁾．
- †13) 小林³⁶⁾によれば、「この世界は、無数の要素の相互連関によって自己自身を形成していく複雑系」であって、その複雑系の論理構造は、西田幾多郎が追及した論理構造に通ずるものであると考察している．
- †14) 直島⁴⁾は、科学観の展開を、近代科学の成立前と成立後、そして共生としての人間観から捉えた科学的特徴を整理している．特にそこでは、内発的發展を伴う社会福祉の理論的展開は、共生としての人間観に従った、科学観そのものの展開が図られなければならないことが考察されている．

文 献

- 1) 一番ヶ瀬康子：「社会福祉学」の独自性と展開．社会福祉研究，41，19-24，1987．
- 2) 横山穰：嶋田理論の再検証に関する一考察 — 嶋田理論が提起したもの —．北星論集，44，127-131，2007．
- 3) 高田眞治：社会福祉内発的發展論 — これからの社会福祉原論 —．ミネルヴァ書房，京都，156，2003．
- 4) 直島克樹：社会福祉内発的發展論からみえる社会福祉理論の新たな展開 — 社会福祉における自己組織性への一考察 —．武田丈・小笠原慶彰・松岡克尚・横須賀俊司 編著，社会福祉と内発的發展 — 高田眞治の思想から学ぶ，関西学院大学出版会，兵庫県，207-232，2008．
- 5) 孝橋正一：全訂 社会事業の基本問題．ミネルヴァ書房，京都，1962．
- 6) 古川孝順：社会福祉学序説．有斐閣，東京，29-34，1994．
- 7) 吉田久一：日本社会福祉理論史．勁草書房，東京，187，1995．
- 8) 岡村重夫：全訂 社会福祉学(総論)．柴田書店，東京，1968．
- 9) 嶋田啓一郎：社会福祉研究と力動的統合理論 — わが思想的遍歴を顧みて．評論・社会科学，17，1-37，1980．
- 10) 三浦文夫：社会福祉経営論序説．硯文社，東京，1980．
- 11) 小笠原浩一：三浦理論の検証．小笠原浩一，平野方紹 編，社会福祉政策研究の課題*三浦理論の検証，中央法規，東京，2-11，2004．
- 12) 古川孝順：社会福祉学．誠信書房，東京，79-95，2002．
- 13) 古川孝順：社会福祉研究の新天地．有斐閣，東京，2-31，56-60，2008．
- 14) 野口定久：地域福祉論 政策・実践・技術の体系．ミネルヴァ書房，京都，14，2008．
- 15) 高田眞治：社会福祉計画論序説〔IV〕— 対象構成：ソーシャル・ワークと一般システム理論 —．関西学院大学社会学部紀要，31，57-67，1975．
- 16) 松井二郎：社会福祉とシステム論 — 米国ソーシャル・ワーク理論のわが国への導入をめぐる —．社会福祉研究，20，10-15，1977．

- 17) Bertalanffy L 著, 長野敬, 太田邦昌訳: 一般システム理論. みすず書房, 東京, 1973.
- 18) 直島克樹: ソーシャルワークの洞察形式に関する研究 — 構造・機能・意味に基づいた洞察形式の接合からの考察 — . 川崎医療福祉学会誌, 18(2), 361-372, 2009.
- 19) 今田高俊: 複雑系とポストモダン — 自己組織性論の視点から(講演). 今田高俊, 鈴木正仁, 黒石晋編著, 複雑系を考える — 自己組織性とはなにかⅡ, ミネルヴァ書房, 京都, 6-85, 2001.
- 20) Jantsch E 著, 芹沢高志, 内田美恵訳: 自己組織化する宇宙 — 自然・生命・社会の創発的パラダイム — . 工作舎, 東京, 126, 1986.
- 21) 稲沢公一: 生態学的視点の理論的境界 — 社会福祉原理研究ノート〔I〕(論説). 社会福祉学, 33(2), 163-186, 1992.
- 22) 佐藤豊道: ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究 — 人間: 環境: 時間: 空間の交互作用 — . 川島書店, 東京, 3, 158, 199, 2001.
- 23) 嶋田啓一郎: 社会福祉における構造=機能論的理解 — 孝橋正一教授の批判に答える. 評論・社会科学, 7, 1-37, 1974.
- 24) 嶋田啓一郎: 社会福祉におけるパラダイム・シフト — ヒューマン・サービス論の示唆するもの — . 社会福祉研究, 50, 20-26, 1991.
- 25) 嶋田啓一郎: 力動的統合理論とソーシャル・ワーク — 未来を約束する専門職活動. ソーシャルワーク研究, 7(2), 2-10, 1981.
- 26) 谷口泰史: エコロジカルソーシャルワークの理論と実践 — 子ども家庭福祉の臨床から — . ミネルヴァ書房, 京都, 150-183, 2003.
- 27) 岡本民夫: 社会福祉の専門性・専門職制度をめぐる背景と課題. 社会福祉研究, 66, 107-113, 1996.
- 28) 直島克樹: 社会福祉理論研究序説 — “科学” からみえる社会福祉理論の視点 — . 関西学院大学社会学部紀要, 103, 101-114, 2007.
- 29) 吉田民人: 自己組織性の情報科学 — エヴォルーションシオニストのウィーナー的自然観. 新曜社, 東京, 12, 1990.
- 30) 細野敏夫: エントロピーの科学. コロナ社, 東京, 1991.
- 31) 直島克樹: ソーシャルワークにおけるシステム理論再考 — 自己組織性の視点からの考察 — . 関西学院大学社会学研究科修士論文, 2006.
- 32) 村上陽一郎: 近代科学と聖俗革命. 新曜社, 東京, 22-26, 1976.
- 33) 松井二郎: 社会福祉理論の再検討. ミネルヴァ書房, 京都, 1992.
- 34) 高田眞治: 社会福祉混成構造論 — 社会福祉改革の視座と内発的発展 — . 海声社, 東京都, 1993.
- 35) Barabási A-L: *Linked — How Everything Is Connected to Everything Else and What It Means for Business, Science and Everyday Life* — . the Penguin Group, 2003.
- 36) 小林道憲: 複雑系の哲学. 麗澤大学出版会, 千葉, 115, 2007.

(平成21年6月1日受理)

Reconsideration of the Dynamic Integrated Theory of Social Welfare
— **Subjects, Views and Consideration for A New Theory of Social Welfare** —

Katsuki NAOSHIMA

(Accepted Jun. 1, 2009)

Key words : the dynamic integrated theory of social welfare, science, system theory, value, dialectic

Abstract

The aim of this work is to clarify the points for a new theory of social welfare, reviewing the dynamic integrated theory of social welfare. The points of that theory focus on the social system of capitalism, the change of the system and the value for social welfare. It is necessary to understand these points for considering new theory of social welfare.

It is possible to clarify three points for a new theory of social welfare. First, we must understand the changes of the system. In a changing system, differences between elements are increased. Secondly, then we must think of the dialectic. The dialectic problem raises a question about the recognition of people. This problem is essential for social welfare. Thirdly, we must examine the human images. This science relates to social and cultural elements. The symbiosis of these contributes to the construction of the theory of social welfare.

Correspondence to : Katsuki NAOSHIMA Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.19, No.1, 2009 1-12)